

# オプション教材ベニバナ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。  
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）  
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

ある人は、生きることの本質は演劇的なものであると考える。ある人は、人生とは砂漠のようなものであると考える。徳川家康は、重い車を坂に押し上げるようなのが人生だと考えた。徳川家康のこの考えは、多分に、功利的なものを含んでいて、生きて仕事をする努力は車を坂に押し上げるように絶えず努力をつづけていれば成功する、という教訓につながっている。

しかし同じような形だが、ギリシャ神話のシジフォスのことを持つて来て説明したアルペール・カミュは、それをもつと人間の原罪のようなものに結びつけて、生きることの本质として説明している。シジフォスはギリシャのコリントの王で、狡猾貪欲な人間だったので、死後地獄で罰として、岩を山の上まで押し上げることを命ぜられる。その岩は、頂上まで届くと、そこからころがり落ちる。するとまたシジフォスはそれを押し上げねばならない。人間は、何人もその内部に持っている狡猾さと貪欲さの故に、生きる上で何等かの岩を押し上げねばならず、しかもその岩は頂上に達すると必ず転がり落ち、彼はまたそれを押し上げることをくり返さねばならない。人間であることの本质の中に、そのような苦行が含まれている、というふうにかミュは考えた。

こういう風に、ある人が、自己の体験から人生についての一貫した論理を作ったり、または別のもの、砂漠とか転がる石などによってそのの本質を説明したとき、それは思想と呼ばれるのである。思想と呼ばれるものは、必ずしも体系的な論理的構造を持たなくてもいい、しかし、それは、ある時の体験、ある事件を説明するのに役に立つだけでは真の意味の思想とは言われない。いろいろな体験、様々な事件にぶつかったときにも、その同じ考えでもその事件の本質を説明して、本人が満足し、やっぱり今度の体験においても人生は砂漠のようなものだと分かったとか、人生は劇場のようだと、繰り返して考えるとき、それは一つの思想と呼んでいい。

なぜなら、その人は常に、そういう比喻の中に、生きることの本质を見出しているのであり、これから起こるであろう将来のことをも、その考えかたによって待ち受けるからである。そのようなとき、それはその人にとっての思想である。しかし、本人だけがそう

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

思っていて、その人の息子も隣人も同僚も誰も、それを人生に就いての唯一の真実として受け容れず、同意もしないとき、それは、一般的な意味での思想とはならない。ある考え方によって、自分だけでなく多くの他人をうなずかせ、より真実な人生の本質を理解させる役目をするとき、その考え方は、はじめてその人から離れて、客観的な一つの「思想」として存在しはじめる。「色は空である」即ち、ものの形はその本質ではない、と解釈されるこの言葉に真実を見出す人が多いとき、それは一つの思想として、人から人に伝わり、時代から時代に語り伝えられて、実在というものについて人を考えさせたりする。そして、人間のあり方の本質を理解させるものとして深い本当の知恵がその言葉に含まれていれば、それは長い生命を持ち、多くの人々に認識を深めることに役立ち、教育の上でも役立つことになる。このように思想というものは、限られた個人的臨時のものから、人類の全部または一部をなす多数の人々に真実を教え、生存についての安定感を与え、よりよき生活に導く力を持つようなものに到るまで種々さまざまである。私たちが、自分の体験を整理して、それを人に語ったり、文章に書いて発表するとき、私たちは、このような考え方、見方、整理の仕方として思想を、高い低い、狭い広いにかかわらず持っている。即ち事実についての考え方を持っている。そのような考え方がすべての人の中にあつて、書いたり話したりする時だけでなく、体験それ自体の中でもその人を導いているのだ。

(伊藤整「体験と思想」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

そこでふと谷の方角を見ると、そちらは壁になつていた。それだけなら特に不思議はないのだが、そこには昔窓があつたらしいのを、割合近ごろになつて塗りつぶしたように思えた。そうだとすればこの小屋の内部が薄暗いのも、あながち外の日光が強いばかりではない。「あそこに窓があれば明るいだけでなく、谷間の景色が見られるのに、それにしてもなぜ。」

そんな事を考えていると、主人が再び姿を現した。主人は口元で笑いながら、彼を見つめたまま、

「何年になるかな、そう八年ぶりだ、八年ぶりではじめて人間に会つたのだ。まあお急ぎでなければ今晚は泊まって明日お出掛けなさい。一番近い人里まで丸二日もかかるのだから。しかし八年も人を見なかったとは。」

そういつて男は何がおかしいのか、大声を出して笑つた。それが非常にたのしそうなので、彼も声をあげて笑つた。ああこの人は世捨て人なのだな、そう思えば、品のいいこの男の態度も、清らかな生活も納得がゆくようであつた。それでこの男の知らないであろうこの数年の出来事を色々と話してやつた。主人は話の内容よりも、元氣な青年を見ながら、人の言葉を聞くのが楽しくてたまらないのだという風に笑いながら、フンフンとうなずいていた。帰省して帰つてきた息子に対する父親のようである。話が一段落すると、

「ところであなたは将来何をおやりになるのかな。」

「私は絵を学ぼうと思ひます。」

「何、絵を。」

突然老人の表情は変わった。今までの行いすました好々爺の隠者の顔は一瞬にして物怖じした醜い老人の顔になつた。急に皺と白い毛がふえたかと思われる。彼は何か悪い事を言つたのかと思つたが、訳がわからないままに口を閉じた。しばらくの間沈黙が二人の間に流れた。今更のように溪流の音が部屋の中にひびいた。やがて老人の顔が平静をとりもどしたので、彼は、

「私が何か悪い事を申し上げたのでしょうか。」

「いや御心配なく。」

しかしそれ以後は、彼はようやくこの老人なり小屋なりが得体が

知れなく思えてきたので、話も決りがちになつた。それに反して、老人は急に能弁になつて、この辺の川魚のよい事や、近くの手で春になると採れる蕨の味のよい事や、秋になると朝から晩まで一冬の薪を集めねばならぬ事を話し出した。しかしその間にも折々老人の顔を恐怖とも焦燥ともつかぬ影が走つた。又一方彼の心は次第に疑問の雲が濃くなつていつた。そしてついには話がとぎれて、二人はその沈黙の中でいらだつた顔を見せて睨みあつてしまつた。やがて老人はそのいらだつた顔の奥から渋い笑いをしぼり出して、

「駄目ですな、やつぱり。実ははじめてお見かけした時からもしやと思つて、しばらく見ていたのですが。あなたがあの谷を眺めている後ろ姿に、昔の私の姿を見たように思いました。私もあなたの年ごろにこの谷を発見して、この谷を絵絹に表そうとしたのです。ところが駄目なのです。無才といえはそれまでですが。私の描く画はみな人臭くて、あなたがさきほど御覧になつた山水の明るい厳しさは、どうしても絹に出てこないのです。この山水は生命を入れる余地のないほど鋭いものですのに、私の絵は木を担つた樵夫、糸を垂れている漁人、岩山に酒を飲んでいる隠士がいても邪魔にならないどころか、それのある方が一層、自然なような絵なのです。先ほども大笑いしましたが、この前に人に会つてから八年、はじめてこの山に入つて三十年になります。妙なものでこの谷川の音の聞こえない所まで行くとか何か忘れ物をしたように思われるのです。もう最近では、この谷を離れる事ができないだけに、見るのもいやになつてきました。あの壁も元は窓でしたが、最近塗りつぶしてしまいました。窓があつたころは、ここからの眺めは全くすばらしいものでしたけれど。」

主人はそういつて、まるで壁を透かしてそとの山河を見ているように目を細めた。その顔は鋭く淋しかった。その庵室に一泊した彼は、何か画に描くことに恐怖と不安を感じながら、老人の教えてくれた道をたどつて人里へ出た。

(三浦朱門「冥府山水図」)





明治以後のわが国の文化は翻訳文化である。西欧の文物を摂取して、これを消化するのに懸命の努力で払われてきたが、翻訳とはどういうことかという問題が最近までほとんどとり上げられないでいたのは興味ある事実である。

まず、翻訳といっても、すべてのものが翻訳されるわけではないが、このことがあまりにもしばしば忘れられている。ヨーロッパの言語と日本語とのように言語の性質がいちじるしく異なっている二国語間において、翻訳される部分は普通に考えられているよりもはるかに小さなものでしかない。

そのうち、もっとも翻訳しやすいのは、パラフレイズを許容する、思想内容、論理、事実などであろう。かならずしも妥当な考え方とはいえないが、かりに、言語を内容と形式に二分するならば、翻訳とは形式を犠牲にして内容を伝えようとする作業にほかならない。翻訳そのものがすでにそのような前提に立つ以上、翻訳文化において、内容が尊重されるのは当然のことである。形式とか形式的というのはつねに否定的な意味合いにおいてのみ使われる語であった。

ヨーロッパ文化は優秀であるとなると、ヨーロッパの言語に含まれている思想内容もすべてすぐれているのだと決めてしまおう。それがどういふ表現形式をとっているかは問題にされない。思想中心の書物においてそうであるばかりではなく、文芸においても思想がもっとも重視されるという傾向が固定する。文学においては、思想が大切であつても、それはナマの思想ではなく、表現という衣裳をまとつたものであることは理屈でわかっている、その衣裳を訳出するのは不可能である。また、表現の微妙な味わいまで感得することは翻訳文化の草創期にあつては期待し難いことでもあつた。

まず、かいなでの翻訳でわかるとただで満足するほかはなかったのである。それが思想内容というわけだ。そしてこの思想が何よりも重視されるのである。芸術においてすら思想が最優先し、すぐれた芸術作品であつても、いわゆる思想がはつきりしていないという理由で却けられるということも珍しくない。

思想があればよい作品だというのは、どんなひどい料理をしてあ

つても材料に栄養があれば、おいしく食べるべきだというものにも似た乱暴な考え方である。いかにおいしいものでも料理の仕方がまずければ食べものにならない。そんな素朴なことさえ、翻訳文化に埋没した時代の人たちにはわからなくなってしまうのであろうか。それでも、まあ、思想だけはとにかく移植し得たようにわれわれは考えてきたのだが、果たして思想を本当に翻訳し得たであろうか。思想はきわめてしばしばそれを表現する言語と密接不可分である。言葉の形式を捨ててしまつては、思想だけを正しく訳出することすら困難なのではないか。わが国では明治になるまでいわゆる翻訳——原語の形式をすてて意味を伝える転換方式としての翻訳をほとんどしたことになかつたことが思い合はされるのである。

たとえば、中国大陸から渡来した文化を理解するのに、翻訳にはよらずに、原文を生かしながら読む訓読法を案出したのである。これは語順のいちじるしく違う二言語間の理解のための処理としてきわめて賢明なものであるということができよう。訓点読みが原語の形式、音声、大きく歪められているのは言うまでもないが、それでもなお、原語の一部分は保たれているから、形式がまったく不問に付されることはない。それだけいわゆる翻訳よりはすぐれているとも考えられるのである。

欧米の学術書の翻訳など、論理と思想が伝わればよいような場合において、きわめて難解な訳文になっていることがよくない。原文を見ると達意の文章になっていてすこしのよどももないのに訳文では何のことかわからないということがおこるのである。そういう例を見るにつけても、翻訳可能なはずの内容も、日本語とヨーロッパ語のよ

うな構造の異なる言語の間では充分に移し切れないのではないかと  
(外山滋比古「省略の文学」)





旅に出て未知の風景に接し、感動する前に、「ああ、絵はがきとそっくり。」というセリフを口にする人をよく見かける。また、最近のように飛行機利用のたびが盛んになると、若い女性が下界を見ながら、「まあ、地図とそっくりね。」という歓声をあげる。しかし人間は、飛行機を発明してから百年とは経過していないのに、今や、驚異的な速さのジェット機を考え出し、それが人間を苦しめようと疲労させようとおかまいなしに、ますますスピードを速めようとつとめている。一昔前は船でインド洋を横断して、はるばると欧州を目指したのに、それが、現在はどうだ。あつという間に目的地に着いてしま

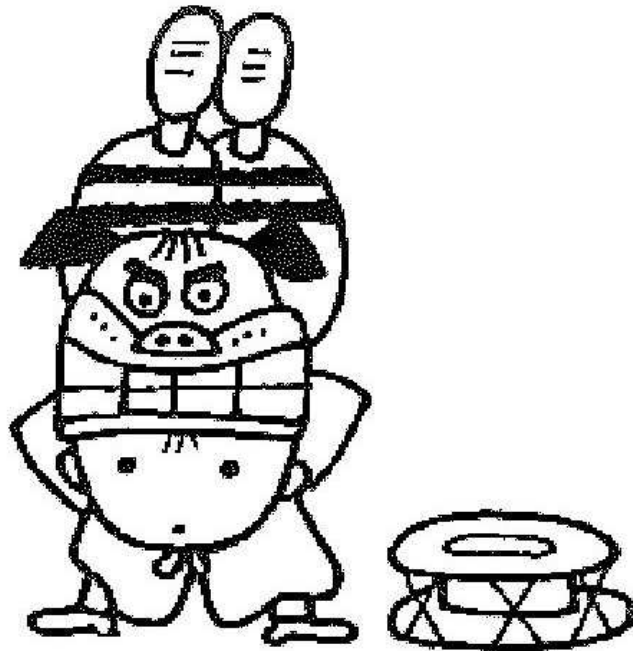
う。思うに、人々は旅というものへの導入部を持つことが少ない。この導入部が実は旅だったのだが、今では目的地へ着くことだけが旅のように思われてしまった。そして、それが旅だと思いこんでしまう現代人は気の毒だ。乗り物は極めて速くなり、時間の節約といちはやく目的地へ着くことは実現されたが、旅情はそれに比例するとはいえないからだ。

そのうち、人々はもうわかってしまっているから、旅に出る必要はないなどといったかねない。旅とは未知のものを知るだけの行為ではないのである。旅をして、「絵はがきそっくりの風景」という感想を口にするような人にとっては、いつそ旅などしない方がいいのだ。

旅は心の中でもできる。病床に臥している人でも、現実 그곳を旅した人よりも旅情を味わっている場合がある。それは想像力が豊かなからだ。逆に、小説の中に描かれた風景や土地にあこがれてそこへ行き、現実には失望したといつて帰ってくるような人もいる。それは、小説家がうそをついたのではない。現実が先行して実景を変えたのでもない。

旅情というものは、意外に、その人の心の中にあるものだということである。ある土地へ旅をして、何が心に残ったか、胸に手をあててそれを思い返してみるとわかる。旅先での、絵はがきや小説では体験できなかった未知の人との出会い、その人のおしやべりやアクセント、そして、そのとき自分が味わった何ともいえない感情、そうしたものが旅の忘れ得ぬ一コマではなかったか。そういうイメージは常に自分の心の側にある。心が風景をみるのである。

（岡田喜秋「旅に出る日」）



古代から中、近世にかけて、公家、武家をとわず支配者の手で馬を通す街道がつくられ、馬をつかって荷物を運び、人が移動するようにになると、街道筋には乗馬の客、荷駄をつれた客を泊める馬宿の設備が必要となる。牛はどこでも平気で横になり、人間といっしょに野宿できるが、馬は神経質で臆病なため、夜は馬宿のような安全な場所につないでやらねばならない。それに牛は道草で充分であるが、馬の旅には飼料の手配が必要である。古く旅宿のことを旅籠屋」とよんだが、旅籠とは馬料をいれる籠のことで、旅籠屋とは馬料を用意し、馬をつれた旅人を泊める旅館という意味であつた。薪を用意し、宿泊の場所を提供するだけで旅人に自炊させ、薪の代金（木賃）をとる木賃宿より上等の旅宿とされたのはじまりであつたという。

馬を手厚く飼うのはむかしから武人のたしなみであり、その息災を祈る厩祈禱は古くからある。夏には蚊帳をかけて安眠させるなど、よい馬ほど神経質で、人間以上に手数を要した。乗馬はかならず二頭そろえ、交互に乗り替えるものとされた。明治、大正の陸軍の高級将校たちも、朝の出勤時に乗った馬は午後は休ませ、夕刻の退勤時には乗り替えの馬を使用した。これも武士の作法として伝来のものであつたという。

したがって馬をつかえるのは、これだけの手数をかけたうえ、なおかつその機動力を利用したい人、利用しなければならぬ人にかぎられてくるのは当然であつた。中世の鎌倉街道が、村落とはかならずしも関係なく、等高線にそって走っているのもそれが馬をつかう鎌倉御家人の道である以上、必然の姿であつたといえる。古代の間道も、開設されたときは、おなじような姿をしていたらう。だがこうした馬の道は、馬を通すために沢山の人手を必要とし、街道の所要所に宿駅、馬宿の設備がつくらなければならない。そして、近世に入る

と、一般農村の生活水準がしだいに向上し、各地城下町の繁栄がすみ、人と商品の流通が庶民生活の次元においても活発になりはじめた。このことから、農耕に馬をつかうのは依然として少なかつたけれど、従来のように支配者たちの政治的、軍事的目的のためだけでなく、一般の商品や旅人を運ぶために馬を

つかうことが多くなつた。駄賃収入をめあてに手数と資金を投じて馬を飼ひ、牛にくらべて上等の飼料をたべさせ、街道に出て運輸業に従事するものが急速に増加した。

民間における商品の流通は、十七世紀末、元禄ごろから顕著になりはじめた。そのころ本街道の宿駅に常備されている伝馬は、もともと公用物運送のためのものであつたから、公用の荷物が立て込めば民間商品はあともわしになる。公用の駄賃は低く押さえられていたから、公用の運送で生じる赤字が民間のものに転嫁されるし、荷物は宿駅ごとに人馬を継ぎ立てるので、損傷することが多い。信州の中馬はこの欠点を補うために発生し、最初は農家の農閑期における現金収入のためにはじまつたのが、やがて専門化した。一人の馬方が四頭の馬を追い、馬宿に泊まりながら数十里はなれたところまで直送したので、途中の荷傷みもすくなく、運賃も通常の宿継伝馬の半分に近かつた。そのため、街道の宿場の問屋たちは既得権益を侵害するものとしてとごとくに圧迫したので、中馬はしだいに宿場のある街道をさけ、間道をえらぶようになったという。

それゆえ近世における中馬道の成立は、交通運輸史上、重大な変革であつた。それまで存在した馬の通う道は、いづれも支配者たちが彼らの政治支配と軍事上、経済上の必要から、強力な政策的努力によつて、上からつくりだされたものであつた。これに対して民間から、純粹に民間物資を馬で運ぶ道がつくられた。支配者から賦課された義務ではなく、自らの才覚で馬を飼ひ、駄賃稼ぎをする人、その人たちを馬ごと泊める家が、馬の道筋に発生したわけである。ここにいたって本街道はもちろん、中馬道のようなものでふくめ、馬の通る道は名実ともに社会の表街道となつた。はじめ馬の道は、支配者の手で村落とはあまり関係ないかたちで設定されたのに、この道筋に人と物資が集められ、町や村の生活がかけられて、社会の経済と、文化の発展をここで担うことになった。

しかしこうした表街道の繁栄の背後にあつて、旧来の馬の通れない道は、けつして消滅したのではなかつた。中馬の活躍した信州を例にとつても、新潟県西部の糸魚川と信州の松本とを結び糸魚川

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

街道は、いちおう平坦な道であつたが、いくつかの小さな峠が馬の通行をはばんだので、もっぱら牛がつかわれた。幕末、ここを通つて北国の塩を信州に運んだ中馬の数より多かつたという。人と牛しか通れない旧来の道は、繁栄してきた馬の通る表街道からは遠い。その意味では、表街道につらなる、賑やかな人里からはなれた、辺鄙で、陰險な間道となり、陰のうすい存在になりはじめたのは事実である。しかし、この間道も、いっぽうではそれ自身で裏街道のネットワークをつくり、おなじように表街道の賑わいから忘れられかけた村々を直結して、その生活をひっそりと支えていた。裏街道という言葉は、この時代には現代の私たちの感じるほどうら哀しい響きはもっていないかつた。近代的な交通機関が馬の道でさえ古いものとして切り捨てるまでは、裏街道もまた、りっぱに社会的効用がみとめられ、生きて働いていた。

（高取正男「日本的思考の原型」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67





伊代はおぼれていた。もう沈む寸前といつてもよかった。体が大きいぶんだけ、動きも大きく鈍くなりゆつくりになっていた。洋がよっぽどプールへ飛びこんで救助しようと思った。けれど、ここでそうしたら、泳げるようになるのは大幅に時間がかかる。あるいは恐怖が倍加する中で、泳げなくなるかもしれない。あんなに待とう。

たぶん、ぎりぎりの線だろう。へたに声をかけてもまずかった。洋は目に力のありつたけをこめて伊代を見つめ見守った。

（腕を動かしてくれ、足で水をけてくれ。ひどい先生やと、おれを憎んでもよいから、憎しみを力に変えてくれ……）

洋はしばらくぶりに祈った。誰にということではなかった。そしてまばたき一つか二つする間、祈りながら自分もおぼれかけていた。小学生のときだ。泳がしたるか。兄ちゃんが言ってくれ、洋少年はパンツ一枚で兄ちゃんの後について川つぶちにおりていった。紀の川の青い深い流れを見ると洋少年は足がすくんだ。兄ちゃんは水泳部の選手サンであり、みごとにポーズで流れに身を躍らせた。河童になつて浮きあがり川ぎしにつないであつた小舟にはいあがつた。洋を手招き、舟にあがらせた。

「どないしたら泳げるようになるの、兄ちゃん……」

無邪気にたずねる洋に、兄ちゃんはいきなり、強い一突きをもって回答した。ひとたまりもなく、洋は流れにまっさかさまに落ちこみ、水をのみ、水をかきむしった。ようやく顔が突き出せて、こんどは犬になつて水の中を走り、やとの思いで舟ばたに片手をかけると、兄ちゃんがその指を一本ずつ外してくれた。再び沈みながら、水中に洋は憎しみのことばを吐いた。

「兄ちゃんのひとごころし。」

しかしそれはみんな泡になつて消え、声にはならなかった。夢中で水の中でもがき続けるうちに再浮上でき、こんどは兄ちゃんのいる舟がこわくて、遠くの岸辺へ泳ぐとあせつていた。泳ぐというより、流されるかっこうでようやく大きな岩にしがみついた。気が

つくと、パンツを流していた。舟に兄ちゃんがいなかった。パンツ、パンツと洋は涙声を張り上げた。パンツは下手の方から兄ちゃん河童が片手に高くさし上げながら泳ぎのぼつて取つてきてくれた。

「洋、泳げたやないか。」

兄ちゃんに言われて初めて自分が泳いでいたのに気がついた。荒療治ながら、兄ちゃん独自の特訓であつた。

洋はおぼれていた。それから死力をつくして浮かび続けようとしていた。流れが洋を運ぶ。へたをすれば遠い遠いところまで運ばれかねなかった。洋はもがき続け、決してあきらめなかった。

（ぼくはまだ子どもやぞ、子どものうちに死んだりしてたまるか）という気持ちで必死にさからつていた。

伊代は、はつと目を見開いた。

「先生、助けてー助けてちようだい。」

口の中で叫んでいるのに、声になつていなかった。体が鉛みたいに重く、藻になつたみたいにゆうらりゆうらりとししか動いてくれない。

（わたし、藻じゃなんかじゃないわ）

伊代は心の中で叫び、手足を動かした。わたしが藻でなくても、藻にからまれて動かなくなりそうな気がした。

「せんせい……」

水の中からせんせいの姿を探した。自分を見つめるせんせいの目が青い光を帯びて輝き、伊予をそっと包んでくれた。伊代は青い光の中で急に体が楽になり、こんどはバレーでも踊っているように、ゆつたりと手足が動かせるようになった。すると体全体がぐんと浮かびあがった。体全体が前に進んだ。これが泳ぐということかもしれない……と伊代はぼんやり思い、少しづつ力をいれて本当に泳ぎ始めていた……。

（助かった）

祈りが通じた気持ちで、洋は両手を合わせるかわりに両手をこぶしにしてかたく握りしめていた。握りこぶしの中から冷や汗がしたたり落ちた。

（今江祥智「牧歌」）



わたしは中学（一中）から高等学校（三高）へかけて京都で育ったので、その頃の私はまことに京都的な少年であつたらしい。まあ言つてみれば物腰の柔らかい少年として日曜日には嵐山などを歩きまわつていたらしく、現に大沢池あたりで友だちと香りのよい菫を摘んできた記憶がいかにもしれなく残っている。

しかしなんといつてもいけばなんましく残っているのは、三高の入試で、もちろん旧制の、しかも全国に七つしかなかった、いわゆるナンバースクール時代のことだから、競争はそれなりに相当はげしかった。

私はどうにか第一志望の京都にもぐり込むことができたが、発表された時の有頂天なよろこびは一生忘れることができない。これはひとつには当時高校の関門さえ通れば、大学へはほとんど無試験で入学できたのだから、高校の入学ということは当時の青年にとつて、いわば一生に一度の難関だったためでもある。しかしそれと匹敵するくらいに思い出されるのがあの大文字の火なのだから、私の記憶の中にもつているあの火の照明度はかなり強いものだといわなくてはならない。

もつともこのことは今の学生にはたぶんあてはまらないことだろう。今のようには市内の随所に鉄骨がそびえているのでは、大文字の火も繁華街のビルのすきまからのぞく明月かなにかのようにさぞみずばらしいものになり下がっているだろうし、赤や青に明滅しているネオンがくれに眺めたのではこれも不景氣な、色あせた存在だろうとなんだか氣の毒になるが、私の学生の頃はそんなものではなかった。

その頃の京都全市の人々がかたずをのんで今か今かと待ちかまえた大文字山は、どこからでもなんのさえぎるものもなく、東方の空を黒々と大きく暮れた夜の都にいた。街の灯もさすが電燈ではあつたが、さみしいものだった。そこへ真つ赤な炎が急に一つまた二つと燃えはじめ、またたく間に炎と一大文字が夜空の一角を領してしまふ。

近所の屋上や路ばたの涼み台などあちこちから感嘆の声が聞こえ

る。それはたぶん京都の市民たちがいつせいに挙げる歓声の一続きみたいなものであつたろう。もつとも、何十年と大文字を見ていない私が、せんえつにこんなことをいつてはどうかと思うが、近ごろの大文字がネオンに圧倒されたり、ビルの間にはさまって見えたとしても、そんなことであの火をつまらぬものになり下がったなどと、けいべつしたくはない。

あの文字どおりに燃えさかる炎にはどんなみごとなネオンのまばゆい動きにも代えがたい情熱がかくされている。その情熱こそは当時の青少年を学問へかりたてたその同じ情熱だった。またあの炎としてともしりかつ消えていく自然のままの光の色あいの中にはなにかしら今日の蛍光灯などには求められない無邪氣純真な真剣さが宿つていた。あの真剣さこそが当時の入試受験生をひたむきに勉強させた同じ真剣さではなかったか。

私は老人の口ぐせをまねて自分の若い頃のよさを手本にして、いまどきの若い者の功利主義やふまじめをお説教しようなどとはけつして思わない。ただ、私の時代のあの大文字が今もなおあんなにも情熱をこめて、真剣に何十年前と同じ姿で燃えているであらうなら、私の愛する青年たちの胸にもまたいたずらにビルにあこがれたり、ネオンにだまされたりしないで、その昔と同じような情熱で学問を愛し、真剣に入試とたたかう心がまえだけは生かし続けてほしいナアと祈るばかりである。

（高木市之助「詩酒おぼえ書き」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

人間は目ざめているかぎり、いつも頭のなかに何かを描いていま  
す。もしここに一枚の白いカンヴァスがあつて、それに人間があれこ  
れ思い描くイメージが、そのまま映しだされるとしたら、いったい、  
その絵はどんな作品になることか。人間の頭のなかほど神秘的なもの  
はない、と言つてもいいと思います。

そこでいま、私は自分を実験台にして、自分の頭のなかを正直に  
描いてみようと思います。といつても、まさか白いカンヴァスに私の  
頭のなかにあるイメージを映し出すわけにはゆきません。やむを得  
ず、それを何とかことばで書き記してみようと思ふのです。

ところが、このような試みは、けつして容易ではありません。なぜ  
なら人間が頭に思い描いているものは、なかなかことばにならないか  
らです。人間は何かを考える際に、ことばで考えています。ですが  
ら、考えていることを、そのままことばにすることは、かんたんのよ  
うに思えますが、頭のなかで考えているそのことばは、けつして完全  
なことばなのではなく、いわば、ことばの断片のようなものです。と  
ぎれとぎれのことばが、浮かんだり、消えたりしている、と言つても  
いいでしょう。それを、そのまま原稿用紙に書き写してみても、当人  
以外には、いや当人にとつてさえ、意味不明のことばの羅列になつて  
しまい、とうてい、理解できる文章にはなりません。

フランスの生理学者ポール・ショシャルは、頭のなかで考えてい  
るそのようなことばを「内言語」と呼んでいます。つまり、人間はこ  
とばで何かを考えているのですが、そのことばは、話したり書いたり  
することばとはちがつた「内言語」だ、ということです。したがつて、  
人間は、つねにふたつのことばを持っているということになります。  
考えるときに使う「内言語」と、話したり書いたりするときに用いる  
通常のことば——シヨシャルそれを「外言語」と名づけます——で  
す。

このふたつの言語は、一見、おなじように思われますが、じつはそ  
うではなく、両者はまったく異質な脈絡のなかにあるのです。です  
から、「思つたとおりに書け」と言われても、そうかんたんにゆきま  
せん。文章を書くということは、「内言語」を「外言語」に翻訳する  
ことであり、その翻訳の作業が何よりも大変なのですから。

しかし、人間の頭のなかには、ただ「内言語」だけが漂っている

わけではありません。たしかに、抽象的な概念は「内言語」によつ  
て意識されていますが、そうした言語とともに、さまざまなイメージ  
が明滅しているのです。いや、言語よりも、イメージのほうが主要部  
分を占めているように思われます。

たとえば、あなたが、リンゴを食べたい、と思つたとします。ある  
いは友だちに会おうと考えたとする。その際、あなたの頭に、まずリ  
ンゴということばが浮かんだのか、それともリンゴのイメージが先に  
現れたのか。友だちの顔が先か、友だちという言葉が最初か。私はい  
まそれを自分に即して考えてみたのですが、どうも、はつきりしませ  
ん。イメージが先のようなでもあるし、ことばがまず浮かんだような気  
もします。

このように、イメージといつても、きわめて漠然としており、さら  
によく考えてみると、イメージは「内言語」と一体になつていてよう  
にも思えます。しかし、イメージの背後に「内言語」があつたとして  
も、あるいは「内言語」の土台にイメージが形成されていたとして  
も、イメージと「内言語」とは、やはりどこかちがつている。イメー  
ジとは画像のようなものであり、「内言語」とはことばだからです。

(森本哲郎「ことばへの旅」)





人間の頭のなかを支配しているのが、そうしたイメージであること  
を、あらためて指摘したのは、アメリカの心理学者ケネス・ボウル  
ディングです。と言っても、彼は、イメージというものの範囲を拡大  
して、人間の意識そのものを「イメージ」に置きかえているのです  
が、ともかく、ボウルディングは、人間の意識を形づくっているのが  
イメージだ、と言うのです。したがって、その内容は複雑で、なか  
かことばにあらわせないのですが、彼はそれを、つぎのように分類  
しています。

一、空間のイメージ。二、時間のイメージ。三、関係のイメージ。  
四、個人のイメージ。五、価値のイメージ。六、感情や情緒のイ  
メージ。七、意識、無意識、潜在意識とみられるイメージ。八、確  
実なイメージと、不確実なイメージ。あるいは、明晰なイメージと、  
曖昧なイメージ。九、現実的なもののイメージと、架空なもののイ  
メージ。十、公的なイメージと、私的なイメージ。  
こうなると、頭のなかのイメージなるものは、心のあらゆる相、と  
言ってもいいように思えますが、ともかく、彼はそれらの意識内容  
を、すべて「イメージ」と考えているわけです。

私はここで、シヨシャルのいう「内言語」の実体を、つきとめよ  
うというではありません。ボウルディングのいう「イメージ」の  
分析を試みようというのでもない。私は、たったいま、自分の頭のな  
かにどんな「内言語」や、どのような「イメージ」が浮かんでいるの  
か、それを実験的にとらえてみようとしているのです。

ところで、そうした「内言語」や「イメージ」は、けっして長くと  
どまつておりません。それは、あたかも水の流れのように不断に変化  
しており、風のようにとらえどころがない。けれど、水が流れなが  
ら、やはり、ひとつの川を形づくっているように、そして風が  
吹きぬけながら、しかも、春風や秋風、あるいは木枯らし、といった  
それぞれの風であるように、頭のなかのイメージや言語も、何となく  
まとまった像を形づくっているように思います。

かつて、私はベルギーの言語学者グロータス神父に、あなたはどん  
なことばで考えるのですか、とたずねてみたことがあります。グロ  
ータスさんは、母国語のほかに英語、フランス語、中国語、日本語な  
ど、たくさんのことばを自由にしゃべることができるのです。

いったい、彼はそのうちの何語で考えているのか。  
すると、グロータスさんは、笑いながら、「ああ、何人から、その  
質問を受けたことでしょうか！ 答えをテープレコーダーに吹きこんで  
おきたいくらいですよ」と言って、こう教えてくれました。  
「わたしはいま、あなたと日本語でしゃべっていますね。そうす  
と、あなたが帰ったあとも、わたしは日本語で考えつづけます。そこ  
へフランスの友人がやってきて、こんどはフランス語でしゃべり合っ  
たとします。そうすると、そのあとは、ずっとフランス語で、ものを  
考える。つまり、わたしの頭のなかの言語は、そのときまで使ってい  
たことば、というわけです。」

もうひとり、私は中国の友人にも、おなじ質問をしました。彼  
は、中国語と日本語を、まったくおなじようにしゃべるのです。彼の  
答えも、グロータスさんと同様でした。その前まで使っていたことば  
で考えるのだそうです。

頭のなかの「イメージ」も、きつとそうなのでしょう。たとえば、  
その前に外界から強く受けたメッセージが、そのままイメージとなっ  
て残り、それを押しのける他のメッセージを受けとるまで、そのまま  
持続しているように思われます。そして、もし、あるとき受けとった  
メッセージが、あまりに鮮明であつたならば、そのイメージは折りに  
ふれて頭のなかに浮かびあがってくるにちがいありません。

（森本哲郎「ことばへの旅」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

一つの分類体系が支配し、それが存在そのものの分類であるとして固定化されている領域の内部だけに生きている人にとつては、「わかる」とは、相手が自分と同じ分類系をもっていることの確認であり、対象を自分の分類体系のどこかに位置づけることであり、「わかり合う」とは、相互に同じ分類体系をもっていることの相互確認であり、それ故の安心である。閉鎖社会での特徴は、「わかり方」がこのような形になっていることである。「君の気持ちはよくわかる」とか、「いまの若者は理解できない」というときの「わかる」とか「理解」は、このような意味である。

じつは、このような理解であれば、対話も評論も不要なのである。同質の分類体系のなかに住んでいるのなら、言葉はいらない。「ハラとハラ」で十分わかり合えるし、以心伝心が可能である。

しかし、これでは本当に「わかる」ということにならない。互いに「わかつている」、あるいは「わかり合っている」と思い込んでいて、じつはわかり合っていないかも知れないのである。子供たちが「理解のある」大人に対して不信感を抱いたり、いらいらしたりすることのなかには、「理解のある大人たち」が、ちつとも「わかつていない」のに、「わかった」ふりをしたり、「わかつている」と勝手に思い込んでいることに對する不満があるのかも知れないのである。最近いかにも「ものわかつたのいい」子供たちが増えているが、わたしは彼らを見て、本当に「わかつている」とは思えない。ちつとも「わかつていない」のに、「わかつた風」をしていると思う。それは大人の考えが本当にわかつていたり、大人のいうことにしたがおうとしているのではなく、「どうせわかり合えないのだ」と割り切つて、無用な摩擦を避け、適当に「良い子」になつて、生活と気分の安定をはかっているのだと思う。

親は安心するであろうが、結局は本当に「わかり合う」ための努力を、両方とも放棄しているのである。これはいまの子供や若者が、ずるいとか老成しているということではない。彼ら自身が少しあとの世代について同じことを感じているはずで、いまの大人が、自分と同じ分類体系が通用していると思ひ込んでいるのに対し、若い人ほど実情が見えているのだと思う。

以上は、日本のなかでの世代間の話であるが、同様の関係が、日

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

本と外国、アメリカとソビエト、欧米諸国とイスラム圏、イスラエルとアラブ諸国、先進国と開発途上国などのあいだにあると思う。これらの当事者が、自分の分類体系だけが唯一の真理である信じ、それ以外のものを排撃している限り、相互理解は不可能で、「わかり合える」ことはできず、結局は、武力にものをいわせて相手をしたかわせるしかないという結果になる。世界全体がそういう方向に進みつつあつて、本当にわかり合う努力が放棄されていつているのが、現在の危機的状況ではないかと思われる。

このように、異質の分類体系が相互の理解を拒否する形で対立し合っているとき、「わかつた風」や「理解ある態度」を示すことは、かえつて事態を混乱させる危険をはらんでいる。一つの分類体系に固執している相手に「理解ある態度」を示すことは、しばしば相手方に、「自分と同じ分類体系をもっている。」と思ひ込ませるばあいもあるからだ。このばあい、相手方がその態度を示した側の分類体系を理解することはもちろんない。結局は理解し合うことなく、理解していると誤解し合うだけである。

したがつて、問題の解決はきわめて困難なのであるが、問題点はきわめて明白であると思う。要するに、西欧的な分類体系こそ唯一絶対のものだと信じられていた一つの時代が去つたのである。このときこそ、思い込みの幻想に安住することなく、本当に「わかり合う」ことが重要であり、その可能性もできたのである。

本当に「わかる」とは、異質的な分類体系を理解することである。それは簡単に「わかつた」とか「理解ある態度」を示したりできるようなものではない。長い、困難な相互の努力によつてはじめて可能になるような、そして可能になつても、実現はきわめて困難な理解の道である。「西欧的な分類体系こそ唯一絶対のものだと信じられていた一つの時代が去つたのである。」と書いたが、だから欧米はダメだとか、日本の分類体系を唯一絶対にせよというのではない。百年たつても、われわれは西欧的な分類体系が「わかつた」などといえないのである。むしろ、いままでは、理解したと思ひ込んでいた傾向が強い。本当の西欧理解はこれからなのである。それほどに「本当にわかる」ということは困難である。それ

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

は、欧米おうべいの人が、日本の分類体系を理解しようとしなかったことと関係がある。

異分野の人との共同研究のことと比べよう。一方的な理解などというものは、ありえないのである。欧米人おうべいじんがわれわれを「本当に」理解しうることばいかにを媒介ばいかいにして、われわれも欧米を「本当に」理解しうる。アラブやアフリカとの関係においても同じである。もともと近い韓国との間にさえ、「本当に」理解し合うという相互努力そうごは、まだきわめて弱いと思う。おのおの、自分の分類体系のなかに相手を位置づけて、理解していると思ひ込んでいる段階にとどまっているのではないかと思う。

閉鎖社会へいさでは、同じ分類体系を共有していれば「わかり合え」、物が事が「わかる」ことも容易であつた。また世界支配の時代には、支配国の分類体系によることが「わかる」ことであり、それ以外の体系は、「わかる必要がない」、あるいは「無意味な」ものとされた。

日本で鎖国時代さこくにすでに、異質的なものの理解の方法を意識化しえたのは、遊廓ゆうかくという日常性とは別の社会の理解を通じてであつたが、いまは、科学の諸分科間、科学者と民衆、国家と市民、文科系出身者と理科系出身者、世代間、民族間、国家間、宗教間で、異なつた分類創造が行われつつある。やがては、地球外文明との相互理解そうごが必要になるかも知れない。その意味でこの文章は、「異星人とのつきあい方入門」なのである。

(坂本賢三けんざう『「分ける」こと「わかる」こと』)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



夜中に喉の渴きを覚えて目をさます。ほんとうは健やかな感覚であるはずだ。

起き上がった水道のところまで行き、冷たい水をコップに一杯、腹の中に流しこむ。その混じり気のない満足がすぐにまた眠りにつながっていく。酔いの重しをつけて底に沈められたような今までの眠りと違って、心地よく小波立ちながらどこまでも平らかにひろがっていく眠りだ。

ところが、起き上がれない。ひたむきな肉体の欲求が、ほんのわずかのところで、どうしても動作につながっていない。暗がりの中で頭を起こして腹這いにまではなっている。枕元の水は寝る前に飲み尽くしてしまった。酒と一緒に水をそんなに飲むというのは、あまり良い酔い方はしていなかったしるした。壁のクーラーが控え目な音を立てて、わずかに涼しい風を首筋に送ってくる。妻と子供たちが薄い毛布の下で三人からだを寄せあつて眠っている。水辺の宿に泊まるという楽しみは、三人の中でどんなふうに満たされているのだろう。

目に映る物の動きがからだの底のほうから軽い眩暈を誘い出す。悪酔いの時のあの感じに似ている。波の動きとともに、なまなましい力が闇の中に遍く満ちわたり、蠢きあっている。それに釣り合うだけの活力が、いまこのからだの中にない。背中のように妻と子供たちが交互にふくらまず寝息さえ、水のゆらめきと、ふとひとつに融けかかると。動きに取り囲まれていることに、つかのま、言いようのない堪え難さを覚えた。しかし目覚め際の感覚にすぎない。目覚めの際に、肉体が生命感をひよいとどこかに置き忘れてきたとしても、不思議はない。よくあることだ。

鹹水湖（塩水をたたえた湖）が山の間まで深く入り込んでいる。向こう岸はもう山地の夜の暗さだ。空もどんより靄って、星ひとつ見えない。都会の夜更けを覆うスモッグに似ている。大勢の人間の吐き出すいきれが空にのぼり、夜気に冷やされて白く凝りはじめ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

る。このあたりに何軒もある旅館やホテルの客たちの寝息だろうか。全部で二、三百人は眠っているはずだ。それとも、人間どもの存在にかかわりなく、大昔から、夏の夜更けになると水面からのぼる靄なのかもしれない。人家も見えぬ山あいの闇の中に立ちこめるいきれ……。草や樹は気孔を開ききつて葉を重く垂れ、獣たちは喘ぎながら水辺へおりていく。このあたりでも、水はまだよほど塩からいのだろうか。

眩暈の感じは徐々に引いていった。水はまだゆらめいている。とりとめもなく動く水を、とりとめもない気持ちで眺める。そういう時間を幾度か重ねて、年を取っていく。何年かに一度ずつ、判で捺したように同じ気持ちで水を眺める自分が繰り返され、それからいつか、存在しなくなってしまう。それでもこの放心の状態の中には、物憂い永遠の感じがたしかになにがしかふくまれている。

舷側に押し分けられた水がしなやかに反りかえる翠色の壁をつくって滑り退いていき、波頭をざわめかせながら、うねりの中に巻きこまれる。そのうねりの群れの前に、二つになる下の子供が立っていた。水の動きにぼんやり眺め入っている様子が細いうなじに表れていて、思わず近づいて背中にそつと手をかけたくなるような後ろ姿だった。そばに行つてやろうかな、と思いながら、遠くから眺めていた。子供の前から、水がじかにひろがっている。甲板からの昇降口にあたるらしく、そこだけ手摺りが切れていて、太いロープが二本ゆるく渡され、その下のロープを子供は左手に握って、からだの重みをわずかにかけている。ロープがその手のところでやや押し下げられて、心もち、外側へ、水のほうへ傾き気味に張っていた。

はつとした時には、手肘が金縛りになって、頭髮がほんとうに逆立っていくのがわかった。夢の中で空足を踏むような焦りが全身を走った。その時、タラップの方で軽やかな足音がして、上甲板から駆けおりてきた若い学生風の男が子供の姿を目に止め、こちらが走

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



り寄るよりも一足早く、子供をロープのそばから抱き取った。後ろで妻が短い悲鳴を上げ、蒼ざめた顔で男のそばに駆け寄って、子供を奪い取った。男はちよつと啞然とした面持ちで妻を見やつてから、また軽やかな駆け足で下の船室におりていった。

すぐに船室に行つて、からだじゅうに冷や汗を掻きながら、礼と詫びをしどろもどろに述べると、男は具合悪そうにうつむいて、「ちよつと危ないなと思つて……」と、まるで言い訳のようにつぶやいた。

下の子がいつのまにか毛布を蹴飛ばして、オムツを当てていた頃のままガニマタにひらいた短い足を母親の腰の上にのせている。あの金縛りの状態では、とつさに後を追つて飛び込めはしなかった。

呆然と見送つてしまった一瞬を取り戻そうとして、人の見る中で、余計な物狂わしい身振りをしたにちがいない。船べりと子供の間に無数のうねりが生き物のようにひろがり、波間から小さな頭が見えて、また呑みこまれる。ガニマタにひらいた短い足が遠くに一瞬のぞく……。

「水が飲みたいな」と、つぶやきがふと口から洩れ、なにか空恐ろしい気紛れの声のように聞こえた。喉の粘膜がささくれ立ったように火照つて、濃くなった唾液が不快な臭いをときおり内側から鼻に送つてくる。しかしからだは頑固に寢床に沈みこんでいく。

目をつぶると、水のゆらめきが全身を包みこんで、奥から眩暈をまたくりかえし誘い出した。

「こんな大量の水に囲まれていながら、コップ一杯の水に焦がれるとは……」という思いが颯め笑いを浮かべて通り過ぎた。

(中西幸雄「友情」)



子どもたち全員と学校の裏手の雑木山に出かけました。日かげの沢にはまだ汚れた雪が残っていましたが、陽だまりは枯れ葉が柔らかい熱を含み、そこを歩くときに頬に暖かみを送ってきます。子どもたちは歓声をあげ、木に登ったり、蔓にぶらさがったり、カタクリを摘んだりしました。教室にいるときは別人のようでした。

枯れ草に腰をおろしていると、六年生らしい女の子が寄ってきました。頬に赤い痣のあるひっそりとした感じの子でした。女の子はだまってわたしのそばにすわり、しばらく枯れ草を引き抜いては編んでいましたが、やがてぼつりと言いました。

「こんどの先生ア、男先生も女ゴ先生もいい先生だね。」  
「……………」

わたしはとっさにはこたえることができませんでした。今の今まで村や分校や子どもたちをよく思っていなかったような気がしました。

わたしは小さな狼狽を押した隠しながら、女の子の名前や家の仕事のことや兄弟のことを聞きまし。里枝というその女の子は、一言一言は恥ずかしがるように言い淀みながら自分のことを語りました。訛の強い方言は、わたしには耳ざわりなはずでしたが、おとなしい里枝の口からそれが洩れると、素直にわたしのからだの中に溶けこんでいくようでした。

先生！ とだしぬけに後ろから背中をたたかれ、わたしは思わず悲鳴をあげました。どんぐり眼の一年生の明が、眼をいつそう大きく見開き、息をはずませていました。

「先生ア、おらア卒業するまでいてくれるね。」

「どうして？」  
「ほだって……………」

明は後ろをふりかえりました。明をからかったらしい背の大きい男の子が朴の木によりかかり、照れ笑いを浮かべてこつちを見ていました。

「兼吉がな。ハイカラ先生などア一年で分校なんかやめて、すぐ町サ帰るって……………」

「先生はハイカラじゃないよ。」

「ハイカラださア、金色の眼鏡かけてエ。」  
わたしは思わず笑いました。女学校の卒業記念に、役場の書記をしていた父が買ってくれた旧式の金縁の眼鏡を、わたしは大事に使い続けていたのです。

（三好京三「分校日記」）



## 読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集2番「この主人は」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 主人は、人に会うのを嫌い、隠遁生活を送っていた。

B 彼が「絵を学ぼうと思います。」といったとたん、主人は不満そうな表情になった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集2番「この主人は」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 彼は、主人の話に納得はしたが、絵を描くのをあきらめはしなかった。

B にこやかに談笑していた主人の表情が突然変わったのは、彼が絵を志していると知った瞬間である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「この主人は」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 主人は三十年前、このあたりの景色を絵に描こうと住み着いた。

B 窓をつぶしてから、主人は心の目で自然を見ることができるようになった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「この主人は」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 主人は、彼がかつての自分のようにこの谷の絵を描くために、住み着くのではないかと知っている。

B 主人が「駄目ですな。やっぱり」と言ったのは、自分の無理な能弁が続かないと思ったからである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集1番「ある人は、生きることの」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 自己の体験を体系的論理的にしたものが思想である。

B 本人が心から思っていることでも、多くの人が同意しなければ、一般的な思想とはならない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「明治以後のわが国の文化は」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 翻訳は、内容を伝えるために形式を犠牲にする。

B 「まずい料理」のまずさとは、形式のまずさの比喻である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「旅に出て」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A どこかに出かけなくても旅はできる。

B 目的地の旅情をじっくり味わうことが旅である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「旅に出て」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 旅とは、自分の知らないところに行くからこそ価値がある。

B 多くの人に共通する思いが、その土地の旅情となる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

## 読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「古代から中、近世にかけて」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 中世の鎌倉街道は、馬の休める村落と村落を結んで走っていた。  
B 民間の手による馬を使った運輸業は、農家の農閑期の仕事として始まった。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「古代から中、近世にかけて」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 牛は、馬の通れない険しい道も通ることができた。  
B 馬の通れない道は、裏街道として生き続けた。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「伊予はおぼれていた」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 洋は、伊予を助けてしまったら、伊予は二度と自分の力では泳がなくなると思った。  
B 洋は、兄のように水泳部に入りたいと思っていた。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「伊予はおぼれていた」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 兄は、洋を泳げるようにさせるつもりで川に誘った。  
B 伊予が泳げるようになったのは、最後にほんの少しだけ先生が手を貸してくれたからである。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「わたしは中学（一中）から」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 昔の大文字焼きは、今の大文字焼きよりも火勢が強かった。  
B 昔は、京都中の人々が、大文字焼きを見ていた。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「わたしは中学（一中）から」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 筆者は、「みごとなネオン」という言葉で、自然破壊を続ける科学技術の危うさを表している。  
B ビルの乱立やネオンの点滅によって、大文字焼きの存続が危ぶまれている。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「人間は目ざめているかぎり、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 人間は、頭の中では「内言語」によって考えている。  
B ひとりごとは、内言語がそのまま表に出たものである。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「人間は目ざめているかぎり、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。  
A 文章を書くコツは、思ったとおりに書くことである。  
B 内言語の一つひとつには、それに対応したイメージがある。  
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×



読解問題 3月4週分

問1 読解マラソン集9番「人間の頭のなかを」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■ボウルディングは、意識を形成するものはイメージだと考えた。  
1 ○ 2 ×

問2 読解マラソン集9番「人間の頭のなかを」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■たくさんの言葉を話すグロータス神父も、普段は母国語で考えている。  
1 ○ 2 ×

問3 読解マラソン集10番「一つの分類体系が支配し、」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■若者は、大人の分類体系が自分たちと異なっていることを理解しているので、反発する。  
1 ○ 2 ×

問4 読解マラソン集10番「一つの分類体系が支配し、」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■一方が相手を理解していない場合、もう一方も相手方を理解していないことが多い。  
1 ○ 2 ×

問5 読解マラソン集11番「夜中に喉の<sup>のど</sup> 渴きを覚えて」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■筆者の感じる眩暈<sup>めまい</sup>は、悪酔い<sup>わるよ</sup>によってもたらされている。  
1 ○ 2 ×

問6 読解マラソン集11番「夜中に喉の<sup>のど</sup> 渴きを覚えて」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■筆者は注意深く、水辺にいる我が子の安全を監視<sup>かんし</sup>していた。  
1 ○ 2 ×

問7 読解マラソン集12番「子どもたち全員と」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■「わたし」は、自分が子どもたちに見られているなどと考えてもいなかった。  
1 ○ 2 ×

問8 読解マラソン集12番「子どもたち全員と」を読んで次の問題に答えましょう。  
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。  
■兼吉<sup>けんきち</sup>は、「わたし」に良い感情を持っていなかったなので、「すぐ帰る」と判断した。  
1 ○ 2 ×

1～3月

|                                                                                                                                    |                                                                                                                                    |                                                                                                                                    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <div>小1</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>小2</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>小3</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> |
| <div>小4</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>小5</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>小6</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> |
| <div>中1</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>中2</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>中3</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> |
| <div>高1</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>高2</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> | <div>高3</div> <div>コード： <input type="text" value="nane"/> パ</div> <div>ス：<input type="text"/></div> <div><a href="#">PDF</a></div> |